

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [佐野 貴治](#) [洪水被害の状況と復旧への取り組み](#)

佐野 貴治（北海道）

洪水被害の状況と復旧への取り組み

カテゴリ 取り組み主体区分：[畜産経営](#) 運営・経営形態：[個人経営](#) 畜種（畜産経営の場合）：[酪農](#)

タグ | [過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例](#) | [被災地での復興経過・プロセス等](#) | [有事の際の対応・リスク管理](#) | [ネットワーク・絆](#)



佐野貴治さん（酪農経営）は、平成18年10月7～9日にかけての低気圧の影響に伴う記録的な豪雨による河川の増水により、施設と農地が冠水した。また、停電や断水、このほか道路被災による交通の遮断等、営農や生活への影響も大きかったが、被害を少しでも和らげるため臨機応変に対処し、近隣農家や地域の支援もあり速やかな復旧を果たすことができた。搾乳が2日間できなかったため、ほとんどの搾乳牛が乳房炎になり、治療に半年ほどかかったが、この乳房炎が原因で淘汰した牛はほとんどいなかった。乾乳舎・育成舎が浸水し、搾乳牛舎も浸水したので、牛は牛舎の水が引いてから、掃除、消毒が終わるまでの1週間ほど近所の農家に避難させた。浸水したスタックサイロの牧草の半分は廃棄し、半分は給与できた。ロールは、水に浸かっていない部分を使用した。冠水したデントコーン畑は、流入した土砂を春に除去した後、播種してデントコーンを作付けた。

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [黒河 富茂](#) 竜巻被害の状況と復旧への取り組み

黒河 富茂（北海道）

竜巻被害の状況と復旧への取り組み

カテゴリ 取り組み主体区分：[畜産経営](#) 運営・経営形態：[個人経営](#) 畜種（畜産経営の場合）：[酪農](#)
タグ | [過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例](#) | [被災地での復興経過・プロセス等](#) | [有事の際の対応・リスク管理](#) | [ネットワーク・絆](#)



黒河富茂さん（酪農経営）は平成18年11月7日に発生した竜巻により被災。停電、農地にガレキが散乱する等、営農や生活への影響も大きかったが、臨機応変に対処し、近隣農家や地域の支援により、速やかな復旧を果たすことができた。竜巻発生時には、農地で乗っていたトラクターの後部に竜巻に運ばれて飛んできたガレキがぶつかり、ガラスが破損した。竜巻の通り道にあった農地に、竜巻に吸い上げられたガレキが散乱したが、農家仲間、JA、町、ボランティアも手伝いに来てくれてガレキを除去した。しかし、それでも撤去しきれないガレキが残っており、その後もトラクターがバンクする等の被害が発生した。当日13時半～22時頃まで停電し、JAでは発電機を手配してくれたが、停電が短時間だったので使用しなかった。通電後すぐに搾乳をしたので、乳房炎は発生しなかった。

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > 佐々木 茂 北海道日高地域を襲った台風による洪水被害からの復興

佐々木 茂（北海道）

北海道日高地域を襲った台風による洪水被害からの復興

カテゴリ 取り組み主体区分：畜産経営 運営・経営形態：個人経営 畜種（畜産経営の場合）：酪農

タグ | [過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例](#) | [被災地での復興経過・プロセス等](#) | [有事の際の対応・リスク管理](#) | [ネットワーク・絆](#)



機械車も土砂が流入し、50cmほど堆積した

平成15年8月に北海道日高地方を襲った台風10号により、佐々木茂さん（酪農経営）の農場前の川が氾濫し、牛舎等の施設に濁水が流入。農場に続く道路の決壊、停電、断水もあったが、近隣農家や地域の支援により速やかな復旧を果たした。牛舎に約50cm堆積した土砂は、支援者約20人が毎日、除去作業を行い、発生から5日目には全部の牛を牛舎に入れることができた。ミルカーは無事だったが、停電したので発電機を持ってきて搾乳した。しかし、集乳車が入れないので、生乳はラグーンに溜めて川に放流。農場に続く道路の崩落で飼料供給がストップし、通常に戻るまでに約1ヵ月を要した。断水対応は発生から4日後には井戸を掘ってポンプで地下水を汲んで与えた。それまでは牛が川に下りて行って水を飲んでた。町では避難場所となった集会場に衛星電話と発電機をセットで備え、連絡体制を整備した。



農場の前を流れる里平川の水かさが増え、氾濫した



土砂のほか流木等が堆積した



農場につながる道路の決壊



草地も土砂が流入した



河川に水を飲みに行った乳牛



水が引いた後も凄まじさが伝わる

取り組み主体区分：畜産経営-その1



牛舎外観



土砂が流入した牛舎内部



機械庫も土砂が流入し、50cmほど堆積した

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [青木 良市](#) [北海道日高地域を襲った台風による山津波災害からの復興](#)

青木 良市（北海道）

北海道日高地域を襲った台風による山津波災害からの復興

カテゴリ 取り組み主体区分：[畜産経営](#) 運営・経営形態：[個人経営](#) 畜種（畜産経営の場合）：[肉用牛肥育](#)

タグ | [過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例](#) | [被災地での復興経過・プロセス等](#) | [有事の際の対応・リスク管理](#) | [ネットワーク・絆](#)



家の裏手から流れてきた山津波

平成15年8月に北海道日高地方を襲った台風10号による集中豪雨は山津波を引き起こし、青木良市さん（肉用牛経営：繁殖牛65頭・乳用種肥育牛770頭）の畜舎や農地、家畜に甚大な被害を及ぼした。直接的被害以外にも、停電や断水、道路被災による交通の遮断等、営農や生活への影響も大きかった。施設用地・畜舎に流れ込んだ土砂は最も高く堆積したところで約3m。家畜が土砂に埋まり、F₁牛200頭近くが死亡した（5日目に自己保有地に埋却）。水道が壊れ牛用の飲水がなくなったので、知人にポンプと発電機を借りて、被災当日の午後から川の水を汲み上げて牛に飲ませた（水道は1週間で復旧）。草地は5haほど土砂が入り込んだが、翌春までには復旧した。被災時、町に子牛の飲み水確保に給水車を依頼したが、町は人命最優先で、家畜は後回し。自分の家畜への対処は自分で行うことを考えておくこととの教訓を得た。



牛舎と圃場を一気に土砂が飲み込んだ



牛舎前の道は重機でガレキを寄せ、車両の通行を確保した



内部に90cmもの土砂が流入した牛舎

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [高橋 哲也](#) [北海道日高地域を襲った台風による集中豪雨被害からの復興①](#)

高橋 哲也（北海道）

北海道日高地域を襲った台風による集中豪雨被害からの復興①

カテゴリ 取り組み主体区分：[畜産経営](#) 運営・経営形態：[個人経営](#) 畜種（畜産経営の場合）：[酪農](#)

タグ | [過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例](#) | [被災地での復興経過・プロセス等](#) | [有事の際の対応・リスク管理](#) | [ネットワーク・絆](#)



高橋哲也さん（酪農経営）は平成15年8月に北海道日高地方を襲った台風10号による集中豪雨に起因する河川氾濫により、停電や断水、道路被災による交通の遮断等により営農や生活への影響を大きく受けた。農場・住宅の洪水被害はなかったが道路の寸断により外部との行き来ができなくなった。このため集乳車が来られず、1日分の生乳は廃棄。15haの草地に土砂が流入したが、災害復旧の事業で土砂を除去して、翌年には蒔き直した。3日間停電したが、保有していた発電機で対応。しかし、発電能力の関係で、バルク、ミルクカー、パーンクリーナーを同時に動かすことができず、1種類しか動かせなかった。そのため、順番に動かしたが、バルクを満杯にすると冷却に時間がかかるため、半分の頭数ずつ搾乳し、冷却するという方法をとった。今後、使用機器の消費電力量に見合った発電機の整備、環境に負荷をかけない生乳の廃棄方法の検討が必要と考えている。

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [杉山 憲由](#) [北海道日高地域を襲った台風による集中豪雨被害からの復興②](#)

杉山 憲由（北海道）

北海道日高地域を襲った台風による集中豪雨被害からの復興②

カテゴリ 取り組み主体区分：[畜産経営](#) 運営・経営形態：[個人経営](#) 畜種（畜産経営の場合）：[肉用牛肥育](#)

タグ | [過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例](#) | [被災地での復興経過・プロセス等](#) | [有事の際の対応・リスク管理](#) | [ネットワーク・絆](#)



杉山憲由さん（肉用牛経営：繁殖牛30頭、F₁素牛150頭）は平成15年8月に北海道日高地方を襲った台風10号による集中豪雨により、哺育牛舎に土砂が流れ込む、土砂崩れで道路が塞がるなどの被害があった。一番大きな被害は断水である。当農場は高台にあるため、農場まで水が上がらないため、農場の下の方にタンク（1万ℓ）を置き、町の水道水を貯め、そのタンクから自家ポンプで農場・住宅に水を上げるといった2段階構えの方法をとっていた。災害時には、町の水道の配管が破損し、水がタンクまで来なくなったので1,000ℓのポリタンクでトラック輸送。分場では井戸水を使っていたが、災害後は水の流れが変わり、枯れてしまったため町の水道に切り替えた。被災時に困窮したことに鑑み、私道の近くの丘に生えている木を伐採するなどの道路維持、新牛舎を建てた際には牛舎の周りに暗渠を入れて水はけ対策、発電機の購入の検討などを行った。

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > (有)岩徹養豚 地域が支えた津波被害からの養豚経営スピード再建事例

(有)岩徹養豚（青森県）

地域が支えた津波被害からの養豚経営スピード再建事例

カテゴリ 取り組み主体区分：畜産経営 運営・経営形態：特例有限会社 畜種（畜産経営の場合）：養豚

タグ 東日本大震災からの再生・復興に向けた活動 | [被災地での復興経過・プロセス等](#) | [有事の際の対応・リスク管理](#) | [ネットワーク・絆](#)



◎再建豚舎 外観

東日本大震災による津波被害で農場が全壊し、豚も溺死等で多くがへい死。残っていた200頭も飼料や水が確保できず、譲渡や早期出荷で全頭を失った。このため経営主は一度は廃業を考えたが、被災直後から地域の人々による献身的な支援があり、後継者の将来を見据えた十分な協議、話し合いにより、経営を再建することを決めた。しかし、経営再建には多額の費用が必要となるため、国の復興事業と制度資金を活用して新たな農場を建設。復興事業をより迅速に推進するため、町、県の行政機関を含めた関係者との協力体制を構築し、定期的な協議を重ねながら、震災から1年半で新農場が完成し、スピード再建を果たした。現在、種豚の導入が始まり、母豚は被災前の180頭から200頭に規模拡大。繁殖効率を高めるために、従来の種豚交配から人工授精方式への切り替えを進めるなど、経営安定に向けた努力を続けている。



◎被災前の豚舎の様子（航空写真）



◎津波で流され溺死した豚たち



◎津波により全壊した豚舎



◎震災（津波被害）2日後の状況



◎4月11日の状況（ガレキの撤去等が終了）



◎再建豚舎（外観）



◎再建豚舎（内部）

Copyright © JAPAN LIVESTOCK INDUSTRY ASSOCIATION (JLIA), All rights reserved.

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > (株)Ｔ・ユニオンデーリィ Ｔ・から始める酪農―原発事故によって浜通りから中通に経営移転―

(株)Ｔ・ユニオンデーリィ（福島県）

Ｔ・から始める酪農 ―原発事故によって浜通りから中通に経営移転―

カテゴリ 取り組み主体区分：畜産経営 運営・経営形態：株式会社 畜種（畜産経営の場合）：酪農

タグ 東日本大震災からの再生・復興に向けた活動 | [移転による経営再開](#) | [有事の際の対応](#)・[リスク管理](#) | [ネットワーク](#)・[絆](#)



Ｔ・ユニオンデーリィの構成員

震災前に福島県浪江町で酪農を営んでいた三瓶さんは85頭（うち経産牛57頭）、妻の弟である今野さんは55頭（同38頭）を飼養していたが、国から計画的避難区域に指定され、おおむね1ヵ月以内に全町民が町外へ避難しなければならなくなった。飼養している家畜についても、避難区域以外へ移動させるか、と畜販売するかの切実な選択を迫られた。迷った末に酪農を休業・廃業するのではなく、二戸共同で新天地での経営継続を選択し、故郷の津島の「Ｔ、二人（三瓶利仙、今野剛）の名前の頭文字である「Ｔ」を屋号に入れ、新たなスタートを切った。移転先は本宮市にある空き牛舎。移転にあたっては牛舎がこれまでの2戸の半分程度のスペースしかないことから、牛群検定成績データを利用するなどして、なるべくよい牛を絞り込んだ。経営管理能力が高い三瓶さんと改良技術の優れた今野さんが一緒になり、今後の発展が期待できる経営である。



避難区域に指定され牛がいなくなった津島の牛舎



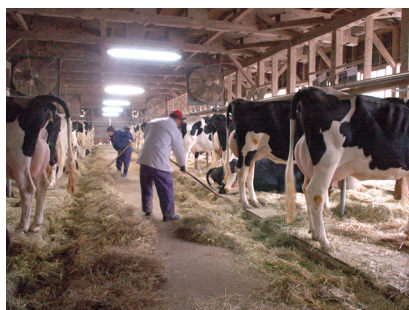
エクセレント牛「ユニオンデール ダンディ ガール」



中通りの移転先の牛舎（前・佐々木牧場）



中通りの移転先の牛舎（前・佐々木牧場）



清潔に保たれた牛舎内部



搾乳中の三瓶恵子さん



子牛・育成



第30回福島県ホルスタイン共進会でグランドチャンピオンに輝いた「ユニオンデール タレント コーリー」

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > (有)大野農場 「小江戸黒豚」の生産・加工・販売を目指した地元重視型の養豚業

(有)大野農場（埼玉県）

「小江戸黒豚」の生産・加工・販売を目指した地元重視型の養豚業

カテゴリ 取り組み主体区分：[畜産経営](#) 運営・経営形態：[特例有限会社](#) 畜種（畜産経営の場合）：[養豚](#)
タグ | [地域飼料の活用](#) | [消費者等への理解醸成](#) | [地域を生かした6次産業化](#) |



経営主と妻と次世代を担うたくましい孫

(有)大野農場は、独自ブランド「小江戸黒豚」の生産、加工、販売の3部門からなる。生産部門は当初、仲間とともに肥育用素豚を主に生産していたが、昭和60年に一貫生産に切り替える。現在は黒豚雌豚100頭規模。年間約1,200頭の小江戸黒豚を出荷している。地元特産のさつまいも、食品工場からの余剰パン、牛乳などを自家配合した食品残さを給餌していることも特徴。加工部門に取り組むに当たっては、肉の基礎技術の習得のために、長女を全国食肉学校で勉強させた。卒業後は、国内外のハム製造所で修行を重ね、自分なりの味、技術を確立した。売り場併設の「ミオ・カザロ」では、自家農場産の小江戸黒豚100%を使用し、増量剤、合成保存料などを添加せずに食肉加工品を製造。販売部門は本店を含め川越市内2店舗で地域の消費者に提供している。店舗隣にバーベキューハウスなどを設置し、平素から地域とのつながりを友好的に維持しており、地域資源の飼料利用と併せて地元重視型の6次産業化の取り組みである。



田畑に囲まれ、富士山を望む農場全景



畜舎内



地域特産のサツマイモ



地域の工場からのパン



攪拌機に投入



攪拌機の中

取り組み主体区分：畜産経営-その1



加工・販売店 全景



店舗内から見た安心な加工場



小江戸黒豚の肉



ミオ・カザロ ホームページ
(<http://www.miocasalo.co.jp/>)

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [関口 健 関口 はるみ](#) 地元で生産した畜産物を地元の人にー消費者ニーズに対応した地産地消ー

関口 健 関口 はるみ（神奈川県）

地元で生産した畜産物を地元の人にー消費者ニーズに対応した地産地消ー

カテゴリ 取り組み主体区分：[畜産経営](#) 運営・経営形態：[個人経営](#) 畜種（畜産経営の場合）：[酪農](#)
タグ | [消費者等への理解醸成](#) | [地域を生かした6次産業化](#) |



国際乳製品を届ける酪農家の会 ホームページ
(<http://www.rakunou.net/>)

関口さんの酪農経営は、地域の人々に酪農について知ってもらいたいという思いから、ふれあい体験を考え、牧場スタンプラリー、地域交流牧場全国会議、酪農教育ファーム認証を受けるなどをしてきた。ふれあい体験を続けていくうちに消費者からアイスクリーム販売の要望があがり、新鮮な牛乳を使ったアイスクリーム販売を開始。軌道に乗った後は、再び消費者からの声で牛乳販売の要望が上がリ、それに応える形でプラントも導入し販売を開始した。消費者との交流を目指し消費者ニーズに答えてきた結果、6次産業化が図られた事例である。地域の仲間である肥育農家と連携し、牧場店舗で葉山牛の販売も行っている。牧場脇の店舗以外に、地元JAが新しく開店し、地域の農畜産業に関わるみんなが顔の見える直売所にも出店している。



関口牧場の紹介ページ
(<http://www.rakunou.net/member/sekigutibokuijyo/>)

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [関 克史 関 裕子](#) 震災を乗り越えた若き牛飼いの道のり

関 克史 関 裕子（新潟県）

震災を乗り越えた若き牛飼いの道のり

カテゴリ 取り組み主体区分：畜産経営 運営・経営形態：個人経営 畜種（畜産経営の場合）：肉用牛肥育

タグ | [過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例](#) | [被災地での復興経過・プロセス等](#) | [有事の際の対応・リスク管理](#) | [ネットワーク・絆](#)



平成24年度全農にいがた肉牛枝肉共助会で最優秀賞受賞

経営者は新潟県の山間地にある旧山古志村（現長岡市山古志）で平成15年に肉用牛一貫経営の後継者として就農したが、翌平成16年に発生した新潟県中越地震で被災。牛舎が倒壊し、その下敷きとなって飼養牛73頭中30頭が死亡。水田、採草地、自宅も崩壊し、肉用牛生産基盤と生活基盤を同時に失った。残った牛を1ヵ月後に救出し、仮牛舎に移動したが、衰弱が激しく3頭が死亡・廃用となった。しかし故郷で牛飼いをしたいとの強い思いから、旧山古志村での経営再建を決意し、平成18年に旧山古志村の肉用牛仲間と「山古志肉用牛生産組合」を設立。国、県、市の助成を受けた共同牛舎・施設の建設、県の復興基金を活用した肥育素牛の導入により、平成21年には震災前の飼養頭数を上回る81頭まで経営規模を拡大した。その後は経営の安定化のために生産技術の向上に努めているほか、旧山古志村の伝統行事である「牛の角突き」に参加したり山古志産和牛の串焼きや精肉を販売したり、地域の活性化を図るための活動を展開している。

「日本一の牛飼い」を目指して

- 繁殖成績の向上（繁殖部門）
分娩間隔 平成23年 11.7ヵ月
目標の1年1産を達成
- 枝肉品質の向上（肥育部門）
枝肉格付4等級以上率 平成23年 100%
目標の95%以上を達成
- 売上高の向上
肥育牛出荷頭数 平成23年 28頭
目標の30頭をほぼ達成

関さんの3つの経営目標



倒壊した牛舎



屋外に放された牛



道路が寸断されヘリコプターで輸送される牛



借用した牛舎で。救出された牛と克史さん



完成した共同牛舎（左：肥育牛舎、右：繁殖牛舎）

取り組み主体区分：畜産経営-その1



畜産物消費拡大イベントで「にいがた和牛」の串焼きを販売



復活した「牛の角突き」

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [農事組合法人M牧場](#) 基幹産業牛飼い復活で地域全体を元気に

農事組合法人M牧場

基幹産業牛飼い復活で地域全体を元気に

カテゴリ 取り組み主体区分：[畜産経営](#) 運営・経営形態：[農事組合法人](#) 畜種（畜産経営の場合）：[肉用牛肥育](#)

タグ [東日本大震災からの再生・復興に向けた活動](#) | [被災地での復興経過・プロセス等](#) | [有事の際の対応・リスク管理](#) | [ネットワーク・絆](#)



旧（左手前）と新牛舎（右奥）

東日本大震災で地域の畜産経営（酪農1戸、肉用牛3戸、養豚1戸）が被災した。経営主のKさん（肉用牛肥育経営・236頭飼養）は畜舎の被害はあったものの、畜舎へのライフラインは震災発生から1日で復旧し、家畜の被害は免れた。しかしながら、集落全体では電気、水道が使えなくなったところが多く、経営者自らが積極的に災害支援のために水の供給や炊き出し支援を行った。また、すぐ隣に仲間の牛舎があったが、畜舎が全壊し、多くの牛が下敷きになるなど甚大な被害が出たため、仲間とともにガレキの撤去作業等を実施。残った牛のうち12頭を自分の牛舎で預かり、残り4頭は避難先の牛舎へ移動させるなどの支援活動を行った。平成23年9月に生産再開に向けて、肉牛生産を基軸に畜産農家と耕種農家5人で農業生産法人を立ち上げ、肥育牛300頭に増頭し本格的な生産活動に向けて準備を進めている。



新牛舎内部の肥育牛

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > T農場 従業員の生活を守るため、豚とともに福島県の被災地から県外へ移転

T農場

従業員の生活を守るため、豚とともに福島県の被災地から県外へ移転

カテゴリ 取り組み主体区分：[畜産経営](#) 運営・経営形態：[特例有限会社](#) 畜種（畜産経営の場合）：[養豚](#)

タグ [東日本大震災からの再生・復興に向けた活動](#) | [移転による経営再開](#) | [有事の際の対応・リスク管理](#) | [ネットワーク・絆](#)



移転先豚舎内部

T牧場は福島県伊達郡川俣町にて養豚繁殖経営（母豚180頭）を行っていたが、平成23年3月11日に起きた東日本大震災により、震度6弱の激震が襲い、豚舎1棟が被害を被った。また、4月には福島第一原子力発電所の事故に伴い、原子力災害対策特別措置法に基づき、農場2カ所が計画的避難区域に指定された。通常の工場のように、貸し倉庫に機材を動かすというような事情と異なり、豚（動物等）の移動・避難となると防疫面の問題もあり、簡単には出来ないのが現状である。そんなとき運良く、県外で廃業により空いている豚舎があるとの情報が入り、従業員を解雇することなく豚とともに移転して経営を継続することが出来た。現在母豚140頭規模。福島県の避難地域解除や風評の終息による福島県での事業再開を夢見て新天地で頑張っている。



移転先の風景



移転先豚舎外観～その1



移転先豚舎外観～その2



移転先豚舎内部



川俣町の被害豚舎

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > 臼井 節雄 臼井 貴子 稲WCSと飼料用米を有効に利用し、飼料費の低減に努力

臼井 節雄 臼井 貴子（岐阜県）

稲WCSと飼料用米を有効に利用し、飼料費の低減に努力

カテゴリ 取り組み主体区分：[畜産経営](#) 運営・経営形態：[個人経営](#) 畜種（畜産経営の場合）：[酪農](#)
タグ | [地域飼料の活用](#) |



搾乳牛舎内部（60頭規模の施設）

臼井さんは、河川敷草地を利用し牧草生産を行ってきたが、水田地帯の立地条件から地域営農集団と連携して稲WCSや飼料用米の生産や利用を拡大し、高品質な地域産飼料の安定的確保を図っている。さらに和牛ETや飼料用米などの収益性を見越した新技術を導入するとともに資金の内部留保に努め、無借金で安定した優良な経営を継続している。河川敷草地や稲WCS、飼料用米や豆腐かす等の地域飼料資源を活用し、飼料基盤に立脚した経営に努めることで、輸入飼料に頼らない足腰の強い酪農経営を実践している。また、大家畜では取扱いが困難であった粗米の活用についても、自ら破碎システムを考案し実践。経産牛65頭に毎日2t弱のTMRを作るが、トウモロコシの代替として飼料用米を300kg混合している。この結果、1年間の飼料費は200万円ほど節約できている。東北地方は米の産地であり、営農集団との連携は可能であろう。畜産サイドは国産粗飼料を安定的に確保でき、輸入粗飼料の価格に左右されない地域畜産が確立できる。



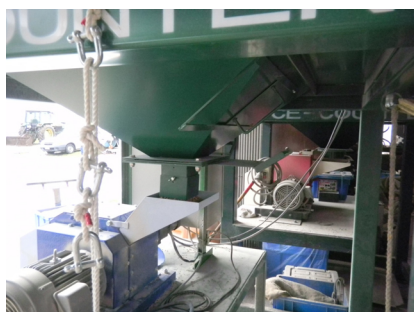
ソフトグレインサイレージ（SGS）調製には人手と機械が必要



飼料用米破碎システムの考案



臼井氏が考案した飼料用米破碎機



実際の使用



配電盤内部のスイッチを入れ、破碎開始



実際の使用



給与風景

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > 大井 幸男 稲WCSおよび飼料用米を利用できる体制の整備と経営内への利用

大井 幸男（岐阜県）

稲WCSおよび飼料用米を利用できる体制の整備と経営内への利用

カテゴリ 取り組み主体区分：[畜産経営](#) 運営・経営形態：[個人経営](#) 畜種（畜産経営の場合）：[酪農](#)
タグ | [地域飼料の活用](#) |



70haから稲ワラ収集している

大井さんは、平成元年にUターンして酪農経営の後継者となり、経営内で技術的に遅れているところを改善しながら規模拡大を行い、現在は経産牛64頭を飼養する。河川敷草地进行積極的に利用し、平成18年には市が占用許可を受けた14haを自力で開墾、草地造成を行った。また近隣酪農家と平成20年には羽島市稲ワラ生産組合を立ち上げ、約70haの水田からワラを収集し、県内外の肥育農家や飼料会社に販売している。また、地元営農組合からの依頼で、稲WCSの生産と利用を開始した。平成24年は約10haに作付けし、稲WCSに調製した全量を大井牧場が購入している。飼料用米の利用も平成23年度から開始した。24年は60tの利用予定で、飼料用米破碎機を購入し、独自で15%をTMRに配合している。牛群検定を積極的に利用し、毎月得られるデータを基に、飼料の給与、繁殖管理を行い、分娩間隔13ヵ月、平均種付け回数1.9回を実践している。稲ワラの販売はもとより耕畜連携のもとで労働配分や地域資源をうまく活用する模範モデルである。



稲WCSロール



稲WCS調製作業



稲ワラロール



河川敷草地



大井牧場の牛舎とパーラー

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > (株)南勢養鶏 万全の危機管理マニュアルと地元の信頼で鳥インフルエンザから復興

(株)南勢養鶏（三重県）

万全の危機管理マニュアルと地元の信頼で鳥インフルエンザから復興

カテゴリ | 取り組み主体区分：[畜産経営](#) | 運営・経営形態：[株式会社](#) | 畜種（畜産経営の場合）：[酪農](#)
タグ | [鳥インフルエンザ](#) | [被災地での復興経過・プロセス等](#) | [有事の際の対応・リスク管理](#) |



直売所内部

(株)南勢養鶏は、三重県南部の過疎地域で成鶏約20万羽を飼育する大規模採卵経営である。従来から地域住民を優先雇用するなど地域社会に貢献し、地域行政とも良好な関係を築いてきた。鳥インフルエンザが発生したが、作成していた対応マニュアルの内容が衛生意識の高い従業員に周知され、模擬訓練も実施されていたこと、異常鶏の発見早々に家畜保健衛生所に通報したことなどがスムーズな経営復興につながった。また、万が一の発生に備えた鶏卵供給ネットワークの活用や仮営業所の確保により取引先に対し普段と変わらない販売活動を継続させることができた。発生後、再発防止のために鶏舎を再点検し改修を行うとともに、経営再開と並行して防疫に対する姿勢や緊急時の対応等について各地での講演や畜産専門誌への寄稿を通じて、関係者へ情報を提供し、防疫意識の向上、生産者同士のつながりの強化および問題意識の共有につなげた。



道路封鎖



鶏舎隣に建てられた作業員テント



殺処分作業



埋却地掘削



掘削後のシート張り



クレーン車による汚染物の投入作業

取り組み主体区分：畜産経営-その1



鶏舎外消毒



敷地内石灰散布作業の様子



敷地石灰散布



すき間の点検修繕



一般道における車両消毒の様子



成鶏舎外観（現在）



農場前の直売所を閉鎖し、新規に別の場所に直売所を開設



直売所内部



消毒ポイント（地域の幹線道路に設けられた消毒ポイント）

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > (株)西垣養鶏場 台風被害からの復興の中で たまごかけご飯専門店開業!! 6次産業化で経営発展と地域振興を目指す

(株)西垣養鶏場（兵庫県）

台風被害からの復興の中でたまごかけご飯専門店開業!! 6次産業化で経営発展と地域振興を目指す

カテゴリ 取り組み主体区分：畜産経営 運営・経営形態：株式会社 畜種（畜産経営の場合）：採卵鶏
タグ | [過去の自然災害の発生日域で再生・復興を果たした事例](#) | [消費者等への理解醸成](#) | [地域を生かした6次産業化](#) |



西垣養鶏場の作業員の皆さん

(株)西垣養鶏場は、平成16年10月に上陸した台風23号により、鶏舎等が浸水するなど被災した。周辺地域は河川の増水による幹線道路の一部崩壊や家屋の浸水などが広範囲に及び、復興は長期にわたった。同社の農産物直売所「百笑館」は、消費者や被災した地域の農業者から営業再開を求められ、被災3日後には営業を再開。遠方から多くの購買者が訪れた。翌18年3月には県の地域復興事業を活用して国内でも先駆けとなる自家産の鶏卵による「たまごかけご飯専門店「但熊」」を開業し、6次産業化と地産地消、地域活性化に取り組む。「但熊」は、地産地消のおいしい「卵」と「米」を提供し多くの消費者の心をつかみ、地域に多くの消費者の集客を促した。さらに平成22年1月には、スイーツ専門店「但熊式番館」を開業、さらなる集客効果を上げている。これらにより、地域に多くの消費者の集客を促し、自己の経営の発展と地域の復興と活性化につなげている。



但東町平田 国道426号



平成16年台風23号による被害（豊岡市但東町）



西垣養鶏場の全景



たまごかけご飯専門店「但熊」



たまごかけご飯専門店「但熊」



ネギとノリをのせてどうぞ



ブランド鶏卵「クリタマ」



台風23号による被害 但東町平田 国道426号 但東町赤花

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [飼原 悠希](#) “真”の新規就農者 定着への道

飼原 悠希（和歌山県）

“真”の新規就農者 定着への道

カテゴリ 取り組み主体区分：[畜産経営](#) 運営・経営形態：[個人経営](#) 畜種（畜産経営の場合）：[肉用牛繁殖](#)
タグ | [地域畜産の存続を支える担い手対策](#) | [ネットワーク・絆](#)



サラリーマン家庭で育った飼原氏は、農業大学校の卒業と同時に、土地なし、畜舎なし、資金なしであったが、熊野牛ブランド化推進協議会の会長に出会い、肉用牛繁殖経営に新規参入し経営基盤を築くに至った。現在は繁殖雌牛10頭を飼養し、和歌山県の肉用牛農家の一員となっている。一貫して飼原さんを支えたのは、地元の肉用牛農家の先輩たちであった。飼養場所の紹介、母牛導入の段取り、グループへの参入と仕事の寄与等、自分でできることは自分で、できないことは助け合うことを基本に一步一步進んできた。新規就農の素地には、①主体性を持って活動すること、②お互いに助言・情報提供すること、③収益を確保すること、④周りの組織の役割が簡素化されていることが必要である。また、新規就農者がいることが、先輩農家の希望・意欲をも膨らませる力につながっている。被災したその土地で畜産を営みたいという強い意志があり、意欲をもつ者は、既存農家であれ、新規就農者であれ周りの者にも良い影響を与えるものと思われる。